

「4〜5時間歩いてきた人も」



病院の中庭に開設した仮設診療所で被災者を治療するAMDAの医師ら。山本太郎さん撮影

現地で診療 長崎大医師



「ネパール大地震で被害の大きかった地域で医療支援の活動をした長崎大熱帯医学研究所教授で医師の山本太郎さん(51)」。写真が7日帰国し、毎日新聞の取材に応じた。民間病院の中庭で被災者の診療に当たり「山に暮らす負傷者が山道を4〜5時間かけて歩いてきた。山の奥深くに村が点在し、診療所に来られない患者もいると思う」と語った。

山本さんは国際医療NGO「AMDA(アマダ)」(岡山市)の派遣チームとして5月1〜4日、カトマンズ北東に車で3時間ほどのシンドゥパルチョーク地区カディチョウルに滞在した。幹線道路沿い

にある病院は損壊し、アマダネパール支部が中庭に張ったテントが仮設診療所に。病院のベッド約10床を運び込み、夜は空いたベッドに患者のそばで眠った。

仮設診療所には毎日約70人のけが人が訪れ、同支部の医師や看護師らを支援する形で診療に加わった。「病院のレントゲン室が動いたのが幸いで、多かった骨折の診断ができた」。骨折しながらつえをついて山道を下りてくる患者もいた。「現地では医療は高価で、病院に行くのを我慢している。山間部の村に『無料なので被災者は安心して来て』と知らせにも行った」と振り返る。

診療所では、家がつぶれて家族が亡くなり、唯一の財産である牛やヤギも下敷きとなったという老婦人にも出会った。「私にはもう何もなくなった」と、看護師に訴える姿が切なかったという。

【下桐実雅子】